

“MY TOWN” うおっちゃん

歩キ目デス & 足ラテス

Vol.63

遺し伝える戦時系遺産・
豊予要塞と八幡浜第一防空壕

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
ヘリテージマネージャー



佐田岬第二砲台砲側庫及び砲座跡

伊方町、三崎の突端には人知れず豊予要塞が横たわる。四国最西端の佐田岬灯台は、それなりに知られた存在ではあるが、このエリアが要塞地帯



軍用棧橋

戦後生まれで還暦前の筆者の世代は、親から戦時中の話を少なからず聞くことが出来た。多くを語ることが無かったが、戦後復興の気分が時代を落ち着かせていて、希に断片を聞くことがあった。戦地での話は思い出したく無かったのか、軍歌や戦後食糧難の際の至る所芋畑の話など、根幹の話では無かっただけに逆に聞く方は想像をたくましくした。今回は、そうした戦時系遺産についてアプローチする。

年配の方から今の内に聞いておかねばならないことがある。“遺し伝える”という事柄が何だかムツカシくなっている時代の今、私たちはそれを何で補い何で伝えるべきなのだろう。特に戦前期の話は、子どもたちからすればもはや祖父父母でも届かない領域で、体験談となれば曾祖父母あたりから聞くしかない。いつの間にか、昭和20年8月の終戦を区切りとして、68年も経とうとしている。

だと詳しく知って訪れる観光客は希である。要塞は、砲台を中心にしてそれを有効に機能させるための諸施設群が、地形を利用して配備されるため、比較的広範囲に展開する。その名の如く、地勢の上では九州対岸の佐賀関（関崎）や鶴御崎、高島と呼応しながら、豊予海峡をはさんで要塞である。日本陸軍が大正8年に設置を決定した。その一方である佐田岬砲台は、灯台直下と御籠島に2門ずつの15センチカノン砲を備えた第一砲台（同15年竣工）と、正野谷地区にある第二砲台（昭和2年竣工）で構成されている。それぞれには、砲弾の射程を測るトーチカのような観測所と、弾薬庫、あるいは探照灯格納庫、軍用棧橋（国登録有形文化財）などの諸施設が付随する。

中でも第二砲台の砲側庫は、よもやと思われる当時のままの戦時迷彩のカラフルさが、見る者の誰をも驚かせ、リアルに時代の空気を伝えていく。手前の円形プール状のものは、30センチ短榴弾砲の砲座であるが、昭和9年には他所に転用され、主なきまいつしか水溜りとなった。同様に第一砲台も戦争末期の19年10



灯台直下の第一砲台

月、火炮が転用撤去となり、佐田岬砲台はその使命を終える。既に大鑑巨砲の時代でなくなっていたのは歴史が証明している通り。

灯台探訪用の駐車場近くには、かつての弾磨き所がかなり傷みつつも残っており、案内看板が無いため一般客は素通りし、知られざる遺構の保全が気にかかる。

さて、市街地にある戦時系遺産にも目をやれば、「八幡浜第一防空壕」の存在が注目される。何よりもその竣工年が特筆事項だ。昭和16年2月22日に竣工式が行われた。既に中国戦線はドロ沼化していたが、まだ太平洋戦争の開戦はその年の12月8日で、空襲など無い時期の防空壕建設で、それは四国初だった。当時の内務省防空課が、同年初頭に本土空襲に備える防空対策としての指導要領を出して



合いかも知らない。

工事は朝鮮人組織の協和会八幡浜支部による勤勞奉仕で敢行され、八幡浜警察署が発注。施工費は当時酒造業で県内有数の出石数だった近くの梅美人酒造が負担し、表彰されている。施工も地元の浜上建設で、当時の竣工写真が残されている。

結局、県内の主要都市には珍しく、この町は空襲被害を殆ど受けなかったが、町名の幸町は伊達じゃ無かった。現在は、地元の幸会の人たちがボランティアで維持管理をして見学者の便をとりもっている。